

人々を苦しめた異常気象と物価高～武州一揆前夜～

飯能市立博物館 学芸員 金澤 花陽乃

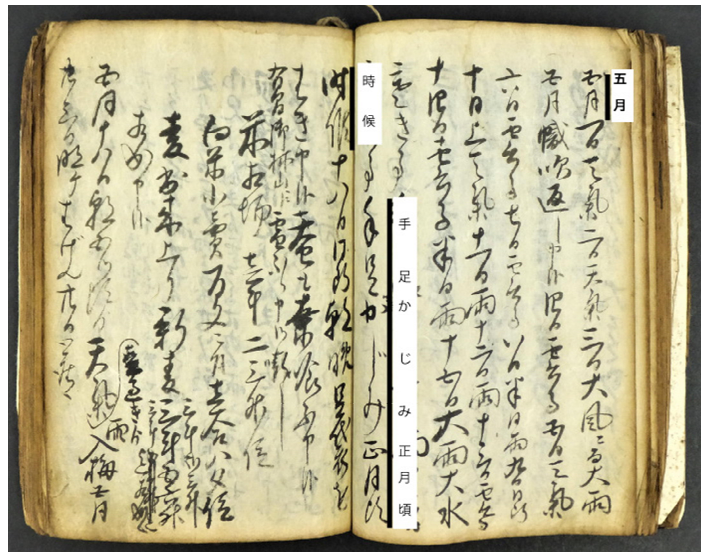
異常気象や不安定な世界情勢などによる物価高が叫ばれて久しくなります。毎日の買い物で溜息をつかれている方も多いのではないのでしょうか。

実は今から 160 年ほど前、江戸時代の終わりごろの人々も同じような思いをしていました。

江戸時代は、ほぼ全期を通して緩やかに物価が上昇し続けた時代でしたが、幕末になるとその度合いが激化します。その主な原因となったのは、天保の飢饉をはじめとした天候不順やいわゆる黒船来航による海外との貿易開始、そして長州征討に伴う米の買い占めなどでした。まさに今と同じ、異常気象と不安定な社会情勢です。

名栗地区に伝来する「古今稀成年代記 第壹号」(平沼宏之家 216)には、当時の気象情報や物価情報が詳しく記載されています。

まず天候については、嘉永3(1850)年以降早魃(ひでり)と大雨洪水を繰り返していたことがわかります。早魃による龍泉寺への雨乞いと洪水被害の記事が交互に見られ、天候に翻弄される当時の様子が見て取れます。また、安政5(1858)年は稀な大雪で杉や檜に大きな損失が出たほか、元治2(1865)年5月には大量に降った雹で茄子、瓜、牛蒡がだめになり、そばも実らず正月のような寒さであったことが記されています。同年は閏5月、6月と雨も降り続いたようです。そして、翌慶応2(1866)年は年始から天候不良でした。3月には大霜により桑の葉が枯れ、5月になっても手足がかじかむほどの寒さで有間の山に雪が降ったことが記されています。



古今稀成年代記 代巻号(平沼宏之家文書)

次に、物価について見てみましょう。まず嘉永3年時点では、1両で4斗5升のお米が買えました。この時点で資料には「大高値」とあります。しかし、この10年後には1両で3斗8升ほどのお米しか買えなくなり、更にこの5年後には1両で買えるお米はわずか1斗5升となっています。15年間でお米の値段が約3倍に急騰していたことがわかります。お米以外についても、塩が4年間で約1.7倍になっているのははじめ、水油、豆、小麦、醤油など文久3(1863)年ごろから「諸品共高値」の状態が続いたようです。しかし、物価高に対して賃金は緩やかな上昇に留まっており、丸1日働いて2人が1日に食べる量の米が買えるかどうか、

といった状況でした。

購入した米や小規模な畑作などで食料を賄っていた山間部の人々にとって、こういった状況は死活問題でした。名栗では有力な村民が村内の各戸へ施し金を行ったようですが、焼け石に水で人々の暮らしの改善には至らなかったようです。

この異常気象と物価高により困窮を極めた人々がついに蜂起し、米穀商などを打ちこわしたのが武州一揆です。今年は武州一揆が起きてから160年にあたります。

